



TITLE:

惰性的素数における虚二次体の ρ 進L関数について (代数的整 数論とその周辺)

AUTHOR(S):

山本, 修司

CITATION:

山本, 修司. 惰性的素数における虚二次体の ρ 進L関数について (代
数的整数論とその周辺). 数理解析研究所講究録 2004, 1376: 32-41

ISSUE DATE:

2004-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/25615>

RIGHT:

惰性的素数における虚二次体の p 進 L 関数について

東京大学・数理科学研究科 山本 修司 (Shuji YAMAMOTO)
Graduate School of Mathematical Sciences,
the University of Tokyo

1 序

K を類数 1 の虚二次体, E/K を K の整数環 O_K による虚数乗法を持つ楕円曲線とする. E に伴う K の量指標を $\psi = \psi_{E/K}$ とおく. また p は K/\mathbb{Q} において惰性的な素数とし, E は p において good reduction を持つと仮定する.

$0 \leq j < k$ なる整数 k, j および K の有限指標 χ に対し, Hecke L 関数 $L(\psi^{-k}\bar{\psi}^j\chi, s)$ の $s=0$ における特殊値を p 進的に補間する p 進 L 関数を考える. p が K/\mathbb{Q} で分解する場合には, k, j を p 進数として動かす, いわゆる 2 変数の p 進 L 関数が構成されている ([1], Chap. II). 一方ここで扱う惰性的な p については, Schneider-Teitelbaum [4] により, $j=0$ として k について p 進補間する 1 変数の p 進 L 関数が得られている. 筆者は修士論文 [6] において, 任意に固定された $j \geq 0$ に対し, k についての p 進補間を与える p 進 L 関数を構成した. 本稿ではこの結果を紹介する.

埋め込み $\overline{\mathbb{Q}} \hookrightarrow \mathbb{C}$, $\overline{\mathbb{Q}} \hookrightarrow \mathbb{C}_p$ を固定する.

ψ の導手を $f = f_\psi$ とおき, $f \mid N$, $p \nmid N$ なる整数 $N \geq 4$ をとる.

$$L = K(E[N]), \quad K_n = K(E[p^n]), \quad L_n = LK_n = K(E[Np^n]) \quad (0 \leq n \leq \infty)$$

とおき, これらの K 上の Galois 群をそれぞれ

$$\Delta = \text{Gal}(L/K), \quad \Gamma_n = \text{Gal}(K_n/K), \quad \mathcal{G}_n = \text{Gal}(L_n/K)$$

とおく.

K の A_0 型量指標 ε に対し, その導手 f_ε が Np^∞ を割り切るとき, ε は連続準同型 $\varepsilon: \mathcal{G}_\infty \rightarrow \mathbb{C}_p^\times$ に拡張される. また特に ψ は $\psi: \Gamma_\infty \xrightarrow{\sim} O_{K_p}^\times$ なる同型を導く (ここで O_{K_p} は K の p 進完備化 K_p の整数環を表す). この同型により, $\mathcal{G}_\infty \cong \Delta \times \Gamma_\infty$ に locally K_p -analytic structure を定める.

定理 1.1 ([6], Theorem 1.1.1)

$(6Np, a) = 1$, $\psi(a) = a \in \mathbb{Z}$ なるイデアル $a \subset O_K$ をとる. このとき各整数 $j \geq 0$ に対して, \mathcal{G}_∞ 上の locally K_p -analytic distribution $\tilde{\mu}_a^j$, および $(\Omega_p, \Omega_\infty) \in \mathbb{C}_p^\times \times \mathbb{C}^\times$ が存在して, 以下を満たす:

任意の整数 $k > j$, および $f_\varepsilon \mid Np^\infty$ なる $(k, -j)$ 型の量指標 ε に対し,

$$\begin{aligned} \Omega_p^{k-j} \int_{G_\infty} \varepsilon \cdot (\psi^{-1}\bar{\psi})^j d\tilde{\mu}_a^j &= (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left(\frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \Omega_\infty^{-k-j} \\ &\quad \times G(\varepsilon) \left(1 - \frac{\varepsilon(p)}{p^2} \right) (N(a) - \varepsilon(a)) L(\varepsilon^{-1}, 0) \end{aligned}$$

が成り立つ.

ここで, d_K は K の判別式, $N = N_{K/\mathbb{Q}}$ は絶対ノルムを表す. また $G(\varepsilon) \in \mathbb{C}$ は ε の有限部分 $\varepsilon\psi^{-k}\bar{\psi}^j$ に対して定まる数 (ある種の Gauss 和) である.

なお上の等式において, 本来左辺は \mathbb{C}_p , 右辺は \mathbb{C} の元であり, 定理の主張はこれらが共に $\overline{\mathbb{Q}}$ に属するという事を含んでいる.

distribution $\tilde{\mu}_a^j$ の構成には, Schneider-Teitelbaum [4] による p 進 Fourier 変換の理論を用いる. これにより, 問題は E の形式群 \hat{E} 上で特殊値 $L(\varepsilon^{-1}, 0)$ の「母関数」を構成することに帰着される. そこでまず第2節において, このような p 進補間と Fourier 変換の関係について, Riemann ζ 関数の場合を例として説明する. 次に第3節で \hat{E} 上の Fourier 変換論, 第4, 5節で母関数の構成について述べる.

2 p 進 ζ 関数と Fourier 変換

本節では Riemann ζ 関数 $\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} n^{-s}$ の特殊値 $\zeta(-k)$ ($k = 0, 1, \dots$) の p 進補間と, 形式乗法群 \hat{G}_m 上の Fourier 変換との関係を説明する.

まず, これらの特殊値の母関数を与える次の命題に注意する.

命題 2.1 p で割れない整数 a に対して

$$F_a(x) = \frac{x}{1-x} - \frac{ax^a}{1-x^a}$$

とおくと, 整数 $k \geq 0$ に対して

$$\left(x \frac{d}{dx} \right)^k F_a(1) = (1 - a^{k+1}) \zeta(-k)$$

が成り立つ.

これにより, $\zeta(-k)$ を p 進補間するためには, $s \in \mathbb{Z}_p$ に対して, 乗法群上の不変微分 $x \frac{d}{dx}$ を「 s 回行う」ことにしかるべき意味を与えればよい. そのために用いられるのが乗法群上の Fourier 変換である.

$\widehat{\mathbb{G}}_m = \text{Spf}(\mathbb{Z}_p[[x-1]])$ を \mathbb{Z}_p 上の形式乗法群とする. このとき同型

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{Z}_p & \xrightarrow{\cong} & \text{Hom}(\widehat{\mathbb{G}}_m, \widehat{\mathbb{G}}_m) \\ t & \mapsto & (x \mapsto x^t) \end{array}$$

が成り立つ.

\mathbb{Q}_p の有限次拡大の整数環 O に対し, \mathbb{Z}_p 上の O -valued measure のなす空間を $M(\mathbb{Z}_p, O)$ で表す. $\mu \in M(\mathbb{Z}_p, O)$ に対し, その Fourier 変換¹ $F_\mu(x) \in O[[x-1]]$ を

$$F_\mu(x) := \int_{\mathbb{Z}_p} x^t d\mu(t) = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\int_{\mathbb{Z}_p} \binom{t}{n} d\mu(t) \right) (x-1)^n$$

で定める.

定理 2.2 (1) Fourier 変換

$$\begin{array}{ccc} M(\mathbb{Z}_p, O) & \longrightarrow & O[[x-1]] \\ \mu & \longmapsto & F_\mu(x) \end{array}$$

は O 代数の同型である.

(2) $\mu \in M(\mathbb{Z}_p, O)$ に対し,

$$\left(x \frac{d}{dx}\right)^k F_\mu(x) = \int_{\mathbb{Z}_p} t^k x^t d\mu(t)$$

が成り立つ.

(3) $\text{supp}(\mu) \subset \mathbb{Z}_p^\times$ となるための必要十分条件は, $\sum_{\zeta^p=1} F_\mu(\zeta x) = 0$ が成り立つことである.

命題 2.1, 定理 2.2 を用いると, $\zeta(-k)$ の p 進補間 は容易に実現できる. 実際命題 2.1 の有理関数 $F_a(x)$ を $\mathbb{Z}_p[[x-1]]$ の元とみなし, $F_a = F_{\mu_a}$ なる $\mu_a \in M(\mathbb{Z}_p, \mathbb{Z}_p)$ をとる. すると

$$\int_{\mathbb{Z}_p} t^k d\mu_a(t) = (1 - a^{k+1})\zeta(-k) \quad (k \in \mathbb{Z}, k \geq 0)$$

が成り立つ.

さらに Galois 群上の測度を得るには次のようにする. まず

$$\tilde{F}_a(x) = F_a(x) - \frac{1}{p} \sum_{\zeta^p=1} F_a(\zeta x) = F_a(x) - F_a(x^p)$$

とおき, これに対応する測度を $\tilde{\mu}_a$ とおくと, $\text{supp}(\tilde{\mu}_a) \subset \mathbb{Z}_p^\times$ であり,

$$\int_{\mathbb{Z}_p^\times} t^k d\tilde{\mu}_a(t) = (1 - p^k)(1 - a^{k+1})\zeta(-k)$$

¹ 「 $\widehat{\mathbb{G}}_m$ 上の」という場合, むしろ逆 Fourier 変換というべきかも知れない.

が成り立つ. そこで円分指標 $\varphi: \Gamma := \text{Gal}(\mathbb{Q}(\mu_{p^\infty})/\mathbb{Q}) \xrightarrow{\sim} \mathbb{Z}_p^\times$ によって $\tilde{\mu}_a$ を Γ 上に移し, これを再び $\tilde{\mu}_a$ と書けば,

$$\int_{\Gamma} \varphi^k d\tilde{\mu}_a = (1-p^k)(1-a^{k+1})\zeta(-k)$$

となる.

3 \hat{E} 上の Fourier 変換

記号は第1節の通りとする. 楕円曲線 E に伴う形式群を \hat{E} とおき, $T^* = \text{Hom}(\hat{E}, \hat{\mathbb{G}}_m)$ とおく (この Hom は $O_{\mathbb{C}_p}$ 上の形式群としての準同型全体を表す). T^* は O_{K_p} 上階数1の自由加群となる. また, $x \in \hat{E}(O_{\mathbb{C}_p})$ に対して

$$\begin{aligned} f_x: T^* &\longrightarrow \mathbb{C}_p^\times \\ t &\longmapsto t(x) \end{aligned}$$

とおくと, $x \mapsto f_x$ は同型 $\hat{E}(O_{\mathbb{C}_p}) \cong \text{Hom}(T^*, \mathbb{C}_p^\times)$ を与える (この Hom は locally K_p -analytic な群準同型全体を表す).

\hat{E} が定める \mathbb{C}_p 上の rigid analytic group を再び \hat{E} で表し, その上の rigid analytic function のなす空間を $\mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p)$ とおく. また T^* 上の \mathbb{C}_p -valued locally K_p -analytic distribution のなす空間を $D(T^*, \mathbb{C}_p)$ とおく. $\mu \in D(T^*, \mathbb{C}_p)$ に対し, その Fourier 変換 $F_\mu \in \mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p)$ を

$$F_\mu(x) = \int_{T^*} f_x d\mu$$

で定める.

定理 3.1 (Schneider-Teitelbaum [4])

(1) Fourier 変換

$$\begin{aligned} D(T^*, \mathbb{C}_p) &\longrightarrow \mathcal{O}(\hat{E}/\mathbb{C}_p) \\ \mu &\longmapsto F_\mu(x) \end{aligned}$$

は \mathbb{C}_p 代数の同型である.

(2) 同型 $t: T^* \xrightarrow{\sim} O_{K_p}$, および E/K 上の不変微分形式 $\omega \neq 0$ を固定し, ω に対応する不変微分を ∂_ω と書く. このとき定数 $\Omega_p \in \mathbb{C}_p^\times$ が存在して,

$$\partial_\omega^k F_\mu(x) = \Omega_p^k \int_{T^*} t^k f_x d\mu$$

が成り立つ.

(3) $\text{supp}(\mu) \subset T^* \setminus pT^*$ となるための必要十分条件は, $\sum_{[p](z)=0} F_\mu(x + \hat{E}z) = 0$ が成り立つことである.

この定理を用いて定理 1.1 における distribution $\tilde{\mu}_a^j$ を構成するには, 命題 2.1 の F_a のような母関数を構成する必要がある. 以下の2節ではこの構成について述べる.

4 関数 $\theta_{E,a}$ と L 関数の特殊値

本節では, L 関数の特殊値がモジュラー曲線上の普遍的楕円曲線 $\mathbb{E}/Y_1(Np^n)$ の上の有理関数 $\theta_{E,a}$ の対数微分の値として現れることを説明する.

4.1 関数 $\theta_{E,a}$

命題 4.1 ([5], Chap. II, Proposition 1.1)

E/S をスキーム S 上の楕円曲線とし, a を 6 と互いに素な整数とする. また $6a$ が S 上可逆であると仮定する. このとき以下を満たす E 上の有理関数 $\theta_{E,a}$ が一意的に存在する:

- (1) a と互いに素で S 上可逆な任意の整数 $b \neq 0$ に対し, E 上の b 倍写像のノルムを N_b と書くとき, $N_b(\theta_{E,a}) = \theta_{E,a}$ が成り立つ.
- (2) $\text{Div}(\theta_{E,a}) = a^2 \cdot [0] - \sum_{P \in E[a]} [P]$.

4.2 微分作用素 ∂, \mathbb{D}

任意の楕円曲線 E/S に対し, $\omega_{E/S} = \text{coLie}(E/S)$, $\omega_{E/S}^\vee = \text{Lie}(E/S)$ とおき, 合成

$$\partial: \mathcal{O}_E \xrightarrow{d} \mathcal{O}_E \otimes_{\mathcal{O}_E} \Omega_{E/S} \cong \mathcal{O}_E \otimes_{\mathcal{O}_S} \omega_{E/S}$$

によって微分作用素 ∂ を定める. これに $\omega_{E/S}^{\otimes r}$ をテンソルして得られる写像 $\mathcal{O}_E \otimes \omega_{E/S}^{\otimes r} \rightarrow \mathcal{O}_E \otimes \omega_{E/S}^{\otimes r+1}$ もやはり ∂ で表す.

またモジュラー曲線 $Y_1(Np^n)/\mathbb{Q}$ 上の普遍的楕円曲線および原始 Np^n 等分点をそれぞれ \mathbb{E} , α_n^u で表し, 作用素 \mathbb{D} を

$$\begin{aligned} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) &\xrightarrow{\nabla} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \Omega_{Y_1(Np^n)}^1 \xleftarrow{\sim} \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \omega_{\mathbb{E}/Y_1(Np^n)}^{\otimes 2} \\ &\hookrightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \otimes \text{Symm}^2(H_{\text{dR}}^1) \rightarrow \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1) \end{aligned} \quad (4.2)$$

なる合成によって定める. ここで $H_{\text{dR}}^1 = H_{\text{dR}}^1(\mathbb{E}/Y_1(Np^n))$ であり, ∇ は Gauss-Manin 接続, その右の同型は小平-Spencer 同型である.

4.3 CM 点における値

記号は第 1 節の通りとする. $H_1(E(\mathbb{C}), \mathbb{Z})$ の \mathcal{O}_K 上の基底 γ を固定し,

$$\alpha_n = \exp\left(\frac{1}{N\psi(p)^n} \gamma\right) \in E[Np^n] \quad (n \geq 0)$$

とおく. また $\text{End}(E) \cong \mathcal{O}_K$ の作用から得られる直和分解

$$H_{\text{dR}}^1(E/K) = \omega_{E/K} \oplus \omega_{E/K}^\vee$$

における第1成分への射影を pr と書くことにする.

このとき, $k > j \geq 0$ および $\sigma \in \mathcal{G}_n = \text{Gal}(L_n/K)$ に対して,

$$L(k, j, \sigma) = \text{pr} \circ (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \mathbb{D}^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a}) \in \underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K L_n$$

とおく. ただし $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_n) \rightarrow Y_1(Np^n)$ は組 $(E, \sigma(\alpha_n))$ によって定まる $Y_1(Np^n)$ の有理点を表す.

$L(k, j, \sigma)$ と, 我々の考える L 関数の特殊値との関係は次の命題で与えられる.

命題 4.3 $\omega \neq 0$ を $\underline{\omega}_{E/K}$ の基底とする. このとき $\underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K \mathbb{C}$ における等式

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) = & (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left(\frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \left(\int_{\gamma} \omega \right)^{-k-j} N^{k-j} \psi^k \bar{\psi}^{-j}(p)^n \\ & \times \left\{ N(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma) - \psi^k \bar{\psi}^{-j}(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma \sigma_a) \right\} \cdot \omega^{\otimes k+j} \end{aligned}$$

が成り立つ.

命題 4.3 の証明の概略を述べる. まず実解析的微分作用素 $\vartheta(C^\infty)$ を

$$\vartheta(C^\infty): \underline{\omega}_E^{\otimes r} \hookrightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1) \xrightarrow{\mathbb{D}} \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1) \xrightarrow{\text{pr}} \underline{\omega}_E^{\otimes r+2}$$

によって定義する. ここで, 最後の pr は Hodge 分解 $H_{\text{dR}}^1 = \underline{\omega}_E \oplus \overline{\omega}_E$ から定まる射影である. このとき

$$L(k, j, \sigma) = (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(C^\infty)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a})$$

が成り立つ. また $\vartheta(C^\infty)$ が C^∞ モジュラー関数に作用する微分作用素

$$\frac{-\pi}{\text{Im}(\bar{\omega}_1 \omega_2)} \left(\bar{\omega}_1 \frac{\partial}{\partial \omega_1} + \bar{\omega}_2 \frac{\partial}{\partial \omega_2} \right)$$

と一致することから, $\vartheta(C^\infty)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{E, a})$ は実解析的 Eisenstein 級数によって表されることが分かる ([2], (2.3.38)). よって実解析的 Eisenstein 級数の CM 点における値と L 関数の特殊値との関係 ([1], Chap. II, 3.5) から命題 4.3 が従う.

5 母関数の構成

L_n の \mathbb{C}_p における閉包を $L_{n,p}$ とおく. この節では, $L(k, j, \sigma)$ を $\underline{\omega}_{E/K}^{\otimes k+j} \otimes_K L_{n,p}$ の中で計算することによって, 母関数を構成する.

以下, 記号の簡略化のため $O = O_{K_p}$ とおく.

E/K の O 上のモデル \mathcal{E} をとり, $\mathcal{E} \bmod p$ の universal formal deformation を \mathcal{E}^u/R とおく. また $n \geq 0$ に対して, \mathcal{E}^u/R 上の ([3] の意味での) 原始 Np^n 等分点の相対モジュライ空間を

$$\text{Spec}(R_n) = [\Gamma_1(Np^n)]_{\mathcal{E}^u/R}$$

とおき, その普遍的原始 Np^n 等分点を再び α_n^u で表す.

5.1 微分作用素 $\vartheta(p)$

(非標準的な) 同型 $R \cong O[[T]]$ をとり,

$$R^{\text{PD}} = \left\{ \sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{T^n}{n!} \mid a_n \in O \right\}$$

とおく. このとき, Gauss-Manin 接続に関して水平な同型

$$H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \cong H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}/O) \otimes_O R^{\text{PD}}$$

が存在する. これと O_K の作用による直和分解 $H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}/O) \cong \omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}$ より,

$$H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \cong \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes_O R^{\text{PD}} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee} \otimes_O R^{\text{PD}} \quad (5.1)$$

が得られる. この直和分解における第1射影をやはり pr で表すと, 合成

$$\phi: \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes_R R^{\text{PD}} \hookrightarrow H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R) \otimes_R R^{\text{PD}} \xrightarrow{\text{pr}} \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes_O R^{\text{PD}} \quad (5.2)$$

は ($T=0$ で identity であることから) 同型となる. そこで作用素 $\vartheta(p)$ を

$$\begin{aligned} \vartheta(p): \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes r} \otimes_R R^{\text{PD}} &\hookrightarrow \text{Symm}^r(H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R)) \otimes_R R^{\text{PD}} \\ &\xrightarrow{\mathbb{D}} \text{Symm}^{r+2}(H_{\text{dR}}^1(\mathcal{E}^u/R)) \otimes_R R^{\text{PD}} \\ &\xrightarrow{\text{pr}} \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r+2} \otimes_O R^{\text{PD}} \xrightarrow{\phi^{-1}} \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes r+2} \otimes_R R^{\text{PD}} \end{aligned}$$

によって定義する. すると, $\vartheta(C^\infty)$ の場合と同様に

$$L(k, j, \sigma) = (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(p)^j \circ (\alpha_n^u)^* \circ \partial^{k-j} \log(\theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

が成り立つ. ただしここでは $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_{n,p}) \rightarrow \text{Spec}(R_n)$ である.

5.2 形式群上への lift

\mathcal{E}^u の形式群を $\widehat{\mathcal{E}^u} = \text{Spf}(A)$ とする. パラメータ X をとって $A \cong R[[X]]$ とし,

$$A' = \left\{ \sum_{n=0}^{\infty} a_n X^n \mid a_n \in R^{\text{PD}}[p^{-1}], |a_n|_p p^{-n\varepsilon} \rightarrow 0 \ (\forall \varepsilon > 0) \right\}$$

とおく. また α_n^u を

$$\alpha_n^u = \alpha_n'^u + \alpha_n''^u, \quad \alpha_n'^u \in \mathcal{E}^u[p^n], \alpha_n''^u \in \mathcal{E}^u[N]$$

と分解する.

このとき, 次の命題を満たす作用素

$$\partial_i: A' \longrightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes i} \otimes_O A' \quad (i = 1, 2)$$

を構成することができる.

命題 5.3 ([6], Lemma 4.4.4, 4.4.5, 4.5.4)

$r \geq 0$ に対して, ∂_i に $\omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r}$ をテンソルした写像 $\omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r} \otimes A' \rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes r+i} \otimes A'$ も同じ記号 ∂_i で表す. このとき $\partial_1 \circ \partial_2 = \partial_2 \circ \partial_1$ が成り立つ. また次の図式はそれぞれ可換である. (ここで $R_{n,Q}^{\text{PD}} = R_n \otimes_R R^{\text{PD}}[p^{-1}]$ とおいた.)

$$\begin{array}{ccc}
 A' & \xrightarrow{\partial_1} & \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes A' \\
 & \searrow \partial & \downarrow \phi^{-1} \\
 & & \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes A'
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccc}
 A' & \xrightarrow{\partial_2} & \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes 2} \otimes A' \\
 (\alpha'_n)^* \downarrow & & \downarrow \phi^{-1} \otimes (\alpha'_n)^* \\
 R_{n,Q}^{\text{PD}} & \xrightarrow{\vartheta(p)} & \omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\otimes 2} \otimes R_{n,Q}^{\text{PD}}
 \end{array}$$

∂_i の構成は次のように行う. まず

$$\phi: \omega_{\mathcal{E}^u/R} \otimes R^{\text{PD}} \hookrightarrow (\omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}) \otimes R^{\text{PD}} \rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O} \otimes R^{\text{PD}}$$

が同型であることから,

$$\mathcal{P}: \text{Spec}(R^{\text{PD}}) \rightarrow \mathbb{V}_O(\text{Hom}(\omega_{\mathcal{E}/O}, \omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee})) = \mathbb{V}_O((\omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee})^{\otimes 2}) =: \mathbb{V}_2$$

なる射 (p 進周期写像) が誘導される (ただし $\mathbb{V}_B(M)$ は環 B 上の有限生成自由加群 M に伴うアフィン空間を表す). さらに

$$\mathbb{V}_1 := \mathbb{V}_O(\omega_{\mathcal{E}/O}^{\vee}), \quad \mathbb{V}_R := \mathbb{V}_R(\omega_{\mathcal{E}^u/R}^{\vee})$$

とおくと, \mathcal{P} の定義から

$$\begin{array}{ccc}
 \mathbb{V}_R \otimes_R R^{\text{PD}} & \xrightarrow{\tilde{\mathcal{P}}} & \mathbb{V}_1 \times_O \mathbb{V}_2 \\
 \downarrow & & \downarrow \\
 \text{Spec}(R^{\text{PD}}) & \xrightarrow{\mathcal{P}} & \mathbb{V}_2
 \end{array}$$

なる cartesian diagram を得る.

命題 5.4 ([6], Proposition 4.4.1)

合成写像

$$\text{Spec}(A') \xrightarrow{\log} \mathbb{V}_R \otimes R^{\text{PD}} \xrightarrow{\tilde{\mathcal{P}}} \mathbb{V}_1 \otimes_O \mathbb{V}_2$$

は, 微分加群の同型

$$(\text{coLie}(\mathcal{E}) \oplus \text{coLie}(\mathcal{E})^{\otimes 2}) \otimes_O A' \xrightarrow{\sim} \hat{\Omega}_{A/O} \otimes_A A'$$

を導く. ここで $\hat{\Omega}_{A/O}$ は (T, X) 進完備化された微分加群を表す.

この命題を用いて,

$$\begin{aligned}
 \partial_i: A' &\xrightarrow{d} \hat{\Omega}_{A/O} \otimes_A A' \cong (\omega_{\mathcal{E}/O} \oplus \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes 2}) \otimes_O A' \\
 &\rightarrow \omega_{\mathcal{E}/O}^{\otimes i} \otimes_O A' \quad (i=1,2)
 \end{aligned}$$

と定める. これらが命題 5.3 を満たすことは比較的容易に確かめられる.

5.3 $L(k, j, \sigma)$ の書き換え

作用素 ∂_1, ∂_2 を用いて, $L(k, j, \sigma)$ を次のように書き直すことができる.

まず $\alpha \in \mathcal{E}^u$ による translation $\beta \mapsto \alpha + \beta$ を τ_α で表すと,

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \vartheta(p)^j \circ (\alpha_n')^* \circ \partial^{k-j} \log(\tau_{\alpha_n''}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ (\alpha_n')^* \circ \partial_2^j \circ \partial_1^{k-j} \log(\tau_{\alpha_n''}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= (x_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ (\alpha_n')^* \circ \partial_1^{k-j} \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n''}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \end{aligned}$$

となる. また α_n を

$$\alpha_n = \alpha_n' + \alpha_n'', \quad \alpha_n' \in E[p^n], \alpha_n'' \in E[N]$$

と分解し, $x_{E, \sigma(\alpha_n)}: \text{Spec}(L_{n,p}) \rightarrow \text{Spec}(R_n)$ の上の楕円曲線の射 $E \rightarrow \mathcal{E}^u$ を $\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)}$ と書くと,

$$\begin{aligned} L(k, j, \sigma) &= \sigma(\alpha_n')^* \circ (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \partial_1^{k-j} \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n''}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \\ &= \sigma(\alpha_n')^* \circ \partial^{k-j} \circ (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_n)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_n''}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a}) \end{aligned}$$

と書ける. さらに, 可換図式

$$\begin{array}{ccc} \text{Spec}(L_{n,p}) & \xrightarrow{x_{E, \sigma(\alpha_n)}} & \text{Spec}(R_n) \\ & \searrow x_{E, \sigma(\alpha_n'')} & \downarrow x_{\mathcal{E}^u, \alpha_n''} \\ & & \text{Spec}(R_0) \end{array}$$

と, $\sigma_p := ((p), L/K) \in \Delta$ に対して $\alpha_0 = [\psi(p)^n](\alpha_n'') = \sigma_p^n(\alpha_n'')$ であることから,

$$L(k, j, \sigma) = \sigma(\alpha_n')^* \circ \partial^{k-j} \circ (\tilde{x}_{E, \sigma \sigma_p^{-n}(\alpha_0)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_0}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

が成り立つことが分かる.

以上をまとめて, 次の命題を得る:

命題 5.5 $\omega_{E/K}$ の基底 ω を固定する. $j \geq 0$, $\sigma \in \mathcal{G}_n$ に対して

$$F_{\sigma, a}^j \cdot \omega^{\otimes 2j} = (\tilde{x}_{E, \sigma(\alpha_0)})^* \circ \partial_2^j \log(\tau_{\alpha_0}^* \theta_{\mathcal{E}^u, a})$$

によって $F_{\sigma, a}^j$ ($\in \mathcal{O}(\widehat{E}/\mathbb{C}_p)$) を定めると,

$$\begin{aligned} \partial_\omega^{k-j} F_{\sigma \sigma_p^{-n}, a}^j(\sigma(\alpha_n')) &= (-1)^{k-j-1} (k-1)! \left(\frac{\sqrt{d_K}}{2\pi} \right)^{-j} \left(\int_\gamma \omega \right)^{-k-j} N^{k-j} \psi^k \bar{\psi}^{-j}(p)^n \\ &\quad \times \left\{ N(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma) - \psi^k \bar{\psi}^{-j}(a) L(\psi^{-k} \bar{\psi}^j, 0; \sigma \sigma_a) \right\} \end{aligned}$$

が成り立つ. ($F_{\sigma, a}^j$ は $\sigma|_L \in \Delta$ にしかよらないので, $F_{\sigma \sigma_p^{-n}, a}^j$ は well-defined である.)

これが求める母関数である. ここから実際に \mathcal{G}_∞ 上の distribution を作る議論はここでは省略する.

参考文献

- [1] E. de Shalit. *Iwasawa Theory of Elliptic Curves with Complex Multiplication*. Perspectives in Mathematics, Vol. 3. Academic Press, 1987.
- [2] N. Katz. p -adic L -functions for CM fields. *Invent. Math.*, Vol. 49, pp. 199–297, 1978.
- [3] N. Katz and B. Mazur. *Arithmetic Moduli of Elliptic Curves*. Annals of Mathematics Studies, 108. Princeton University Press, 1985.
- [4] P. Schneider and J. Teitelbaum. p -adic Fourier theory. *Documenta Math.*, Vol. 6, pp. 447–481, 2001.
- [5] T. Tsuji. Explicit reciprocity law and formal moduli for Lubin-Tate formal groups. Preprint.
- [6] S. Yamamoto. On p -adic L -functions for CM elliptic curves at supersingular primes. Master's thesis, the University of Tokyo, 2003.